

事業所活動紹介

地域社会の中で ソーシャルワーク実践の意義

愛泉会設立37年となり機関紙ひまわりは
今号で100号となりました。

この記念すべき発刊にあたってこれまで愛泉
会を支えていただいた多くの皆さんに心より
感謝申し上げます。愛泉会は知的障がいのある
子供を持つ親と特別支援学校の先生方によって
発足いたしました。当時は知的障がいのある
利用者は出身地を遠く離れた施設での生活を
余儀なくされ、県都山形に「知的障がいのある
人の入所施設を」が合言葉でした。私事で恐縮
ですが初代理事長である伊藤泉さんの息子さん
を施設で担当した縁で声がけいただきました。

伊藤理事長は向陽園の建設にあたって資金
面で大変な苦労がありさらに建設予定候補地
において住民から次々と反対にあい、悔し涙を流さ
れるのでした。そんな理不尽なことがあっていい
ものかとの思いから当時23名の仲間と共に入
職いたしました。本沢地区に開設できたわけ
ですがその当時画家で有名な齋藤二良先生の奥様
である齋藤みよの先生が民生委員として各戸を
回り説得していただいたことを最近になって地元
の栗野省三さんからお聞きしました。開設後も

社会福祉法人愛泉会
理事長
井上 博



無断外出が頻発するなかで拘束としての鍵は
使わなかったのですがその様子を見て寒河江博
さんは「日本一の向陽園」と私たちを励ましてくれ
ました。その後グループホームや日中事業所開
設にあたって各地で住民から反対にあいましたが
そのたびに良き理解者との出会いをいただき
今があります。そのことは山形県の障がいのある
人もない人も共に生きる条例制定のきっかけとも
なりました。現在は東南村山園地で様々な事業を
通して、多くの利用者の皆さんにご利用をいた
だきスタッフは270名の方々が働いています。

時代の理念は地域共生社会の実現と意思決定
支援となりました。愛泉会はこれからも障がい
のある利用者が地域社会の中で充実した日々を
送ることが出来るよう支援にあたり、彼らが
社会に参加することで地域社会をやさしく変える
活動を続けてまいりますので今後とも一層のご
支援ご協力をお願い申し上げます。

支え愛

『地域共生社会の体現』

愛泉会とは評議員として関わるだけでなく、一介護
事業者としても非常に多くの学びをいただいております。
私は高齢者施設を運営しておりますが、障がい者福祉は
知的・身体・精神と幅広くありながらも深い専門性を
要することを改めて学びました。そして職員が持つ専門
的知識の多さ、その対応力・応用力の素晴らしさには
常々感心しております。

現在、天童市には障がい福祉サービスを必要とする
方の人数と事業所数の不均衡が見取れます。そのよう
な状況の中、愛泉会の活躍は天童市民には必要不可欠
な事業所としてありがたく思っております。そういった
経緯もあり、このたび愛泉会から学び得たことを形に
しようと天童市に介護施設をベースとした共生型事業所
を設置し、ここでも愛泉会から多大なご協力をいただ
いている次第です。

さて、国・地方自治体で地域共生社会を取組みはじめ、
早や5年が経ちました。この間、中心的存在となったのは
行政ではなく民間の事業者でした。県内でも愛泉会では
いち早く障がい者が地域で活躍できる仕組みをつくり、
社会の一員として活躍できるよう、様々な取組みをされ
ています。それは「暮らす、働く、活動する、社会生活を支

社会福祉法人愛泉会 評議員
社会福祉法人つるかめ副理事長
伊藤 順哉



える、つなぐ・調整する、子供と家族の支援」といった各
事業に反映され、他の手本となっています。中でも私が
興味深く関心を寄せたのが「まいんどパーク」の取組み
です。一般の子供、学校などが利用することで、幼少期
から自然と福祉にふれあう機会をつくった好事例では
ないかと思えます。また、同一法人に様々な種別の就労
事業所があることは、働きたい障がい者が自分に合った
仕事を選べる素晴らしい仕組みです。そういった取組
みは、欧米の福祉先進国と同じように、ハード面にばかり
偏らず、ソフト面に大変重きを置いているように感じ
ます。愛泉会の取組みは地域社会で普通に暮らす、ともに
働く、そして支え合うという、地域共生社会を体現する
先進法人ではないでしょうか。これからも地域共生社会
を体現する先進法人としてますますご活躍されることを
心より期待いたします。

『地域とのつながりから生まれる無限の可能性』

デイサポートさくら

3年目となるさくらファーム(畑活動)、今年は
小さな耕運機を購入し、利用者と一緒に土を耕す
ことからスタートしました。支援者の心配をよそ
に耕運機の振動が心地よいのか、順番待ちの列が
できるほど、皆さん楽しみながら取り組まれ、今
年も多くの野菜を育て収穫することができまし
た。

そして、今年新たに挑戦した「ピザ窯」作り。
きっかけは、事業所に配布された公民館だよりで
コロナ禍でも地域住民の交流を大切にしたいと
山元公民館が地域の有志の方々とピザ窯を制作
したという記事を読んだことでした。小笠原館長
さんに「ピザ窯の作り方を教えてください!」と願
いすると二つ返事で引き受けて下さり、設計図や
材料の仕入れ、下準備、そして制作と小笠原館長
さんのお力添えにより、念願のピザ窯が完成しま
した。

制作には利用者も参加し、泥団子をつくり土台

に貼り付ける工程は笑い声が絶えない時間で
した。

地域との連携により、経験・体験の幅が広がり
利用者は様々な変容を見せて下さっています。
地域の中で人とつながることで生まれる無限の
可能性を日々感じ、山元公民館をはじめ、地域の
皆さんに心から感謝し、これからもデイサポート
さくららしい挑戦を続けていきたいと思えます。

[デイサポートさくら 所長 深瀬 和美]



『みんなの"得意"を活かした 手作り名刺』

デイサポートにじいろ

にじいろでは午前中「働く活動」を行っています。
その活動の中で牛乳パックから和紙を作成し、
名刺に加工して販売を行っています。

和紙を作成するまでには、牛乳パックをハサミで
切る、煮た牛乳パックのラミネートを剥がし中の
紙を取り出す、取り出した紙をハンガーピンチに
干して乾かす、乾いた牛乳パックを取り込み、シュ
レッター掛けを行う、ミキサーにかけて紙を漉く等
沢山の工程が必要になります。その中で、ハサミが
使える利用者は牛乳パックを切る作業、細かい作業

が得意な方はハンガーピンチの作業、細かい隙間
に紙を入れることが出来る方はシュレッター掛け
など、利用者の得意な事や好きな事を活かしながら
作業に参加して頂いています。利用者が協力して
作った和紙を形にし、商品化できないかと考え、
名刺作りに至っています。

利用者の頑張り詰まった名刺は、他の物とは
異なり温かみがあります。外部の方にお渡しする
と「これ、他の物と違いますね」「いいですね」
とのお言葉を頂く事があります。その言葉を聞くと
嬉しく感じると同時に、頑張って作業されている
利用者にもこの言葉を届けたいと感じます。

手作りの名刺は大量生産が難しいため、現在、
名刺の注文いただいているのは愛泉会の職員のみ
にとどまっています。課題は多くありますが、行く
行くは外部の方にももっと手作り名刺を知って
いただき、注文いただけるようになればと考えて
います。

[デイサポートにじいろ リーダー支援員 大場 祥子]

